



災害を経験した子どもたちに必要な支援について、森田教授に伺った特集記事をWebメディア「LINK@TOYO」にて公開中です。

LINK@TOYO

検索



Professor's Scoop

学問の領域は広く深く、日々進化しています。

本学の教育・研究を担う教員の目に、世界はどのように映るのか。

児童福祉を専門とし、東日本大震災発生以降もさまざまな支援・活動を行ってきた社会学部の森田明美教授にお話を伺いました。

社会学部 社会学部 社会学部 教授
社会学部 社会学部 社会学部 教授

森田 明美

Profile

東洋大学社会学部社会学部社会学部教授、社会学部社会学部社会学部教授。専門は子どもの権利を中心とした児童福祉学。日米の共働き、シングルマザー・ファーザー、10代の母親など子育て家庭の実態と、保育所・幼稚園、児童館などによる子育て支援に関する実証的研究を行い、東日本大震災以降は被災地の中高生を支援する活動を行っている。NPO法人こども福祉研究所理事長、東日本大震災子ども支援ネットワーク事務局長も務める。



<サマーレスバイトデイズ>



<山田町ソントハウス>

被災者に寄り添い 支援を進めてきた10年。

東日本大震災発生からの10年。東洋大学はこの間、あらゆる角度から被災者支援を続けてきました。発生直後から被災した在学生や家庭に向けた経済的な支援や、大学の「知」をいかすべく対策チームを発足し、各教員が持つ専門性に基づく支援活動を開始。また、「東北応援プロジェクト」と称し、多くの学生やゼミ、学生団体が清掃活動などをはじめとしたボランティア活動をしてきました。

私自身は児童福祉を専門にしており、被災した子どもたちの支援を続けています。子どもの権利を基盤とした支援の展開をするため、支援活動に取り組むNPO・NGOをまとめる「東日本大震災子ども支援ネットワーク」を立ち上げるなど、学生とともにさまざまな活動に取り組んできました。岩手県下閉伊郡山田町では中高生を対象にした軽食付きの自習室「山田町ソントハウス」の設立・運営や、福島県ではひとり親家庭の子どもたちを本学のセミナーハウスに招き、思い切り遊んでリフレッシュしてもらう「サマーレスバイトデイズ」を実施。被災地で、友達や家族と遊ぶ時間も場所もない子どもたちが本学の学生と触れ合い、心を開いてくれる様子は印象深いものでした。

一人にしない。 語ることが前を向く力になる。

支援活動で最も大切なことは「誰一人として一人にしないこと」です。震災で体験したことは、想像をはるかに超えるつらいものです。東日本大震災は日中に発生したため、家族もバラバラの場所で被災しそれぞれに体験が異なります。家族にすら共感してもらえない、できない。だからこそ、まず「ただそこに一緒にいること」がとても大切です。悲しい時は寄り添い、楽しい時は一緒に笑ってくれる。そんな日常に安心し、感情が整理できて、初めて人に語れるようになります。

例えば、先のソントハウスではボランティアの大学生は入れ替わりで数日しか滞在しません。それでも子どもたちが「〇〇さんいる？」と会話を楽しみに訪れました。なかには別れを惜しんで泣いてしまう子も。年の近いお兄さん、お姉さんだから心も開きやすいのでしょう。そうした関係性は、凄惨な災害が残した心の傷に深く寄り添うものだと実感しています。誰かが寄り添ってくれて、自分の体験や苦しさを共有してくれることは大きな自信に繋がります。語ることで未来を生き抜く力が育ち、それは復興を担う大きな力にもなるのです。

未来を担う力が 着実に動き始めている。

これまで日本では災害支援を考える際に、子どもの権利の視点はあまり重要視されていませんでした。しかし、大きな災害時こそ子どもが理解できるように説明し、状況を共有し、解決策と一緒に考えて進めていくことが大切なのです。子どもたちは精神的に未熟な段階で、苦しい記憶の整理もままならず、どうして自分が悲しいのかまだ理解できない。この問題を整理できずに大人になると、ふとした瞬間に記憶がよみがえり、塞ぎ込んでしまったり、生きる希望を見いだせなくなるのが現実起きています。

しかし、信頼できる人に出会い、支えられた人は考え、動き出します。2016年にはソントハウスを利用していた高校生が、支援の恩返しをしたいとハウス内に自ら企画・運営するカフェを開き、地元の人たちとの交流の場をつくるなど、支援を受けたことがきっかけとなり新しい動きが生まれました。また、震災自体を風化させないように、大学生や社会人になった当時の子どもたちが故郷へ戻り「語り部」になるといった事例も増えてきました。この10年で成長した人々が何を掴み、行動に移したか。私たちは知り、そこから学ぶことができる節目の10年になったと思います。

これからの10年で 私たちにできること。

私たちは首都圏で生活をしていると東日本大震災を東北地方で起きた出来事だと認識し、自分には関係の薄いものだと考えてしまいがちです。しかしあの日に東北で大震災を経験した学生や子どもたちは、現在は地元を離れて進学したり、社会へ出たりと、全国各地で新たな暮らしを歩み始めています。あなたのクラスメイトやサークルなどで知り合った仲間たち、バイト先の同僚など身近な人たちの中にもこの震災を東北で経験した人がいるかもしれない。そして、いまなお苦しみを抱えている可能性もあるのです。

もし、あなたの周りでそうした人が居た時には「きつとつらい記憶だから触れないでおこう」と思わず、そっと寄り添ってあげてほしいと願います。身近な一つの手段として、震災を振り返った想いをSNSなどでつづるのもよいでしょう。少しの心配りが「話してみよう」と誰かの背中を押し、人生を支えるきっかけになるかもしれません。日本が自然災害の多い国であることは変えたい事実です。この先、自分自身が被災する可能性もあります。そうした時、誰かの支えとして寄り添った経験は、いつか自分自身を強く保つことにもいかされるでしょう。